



ニュースレター **あるがまま** 第 27 号

(近藤喬一先生追悼号)

2025 年 3 月 30 日発行

追悼 近藤喬一先生

2024 年 8 月 8 日、近藤喬一先生がご逝去されました。

近藤先生は、東京慈恵会医科大学を卒業された後、1954 年から 1960 年までの 6 年間、高良興生院で勤務されました。

近藤先生が、若き日に勤務された興生院のことを話されたことがあります。「そこは、自然に囲まれた環境の中に、医師や様々な職種の人が居て、一種の治療チームが形つくられている。その中で、患者さんは、身体を動かし、また、思い思いに時を過ごす。興生院で出会った患者さんのお一人お一人が思い出される」。

先生は、本会設立当初から役員として関わってくださり、講演会でお話いただいたり、ニュースレターに投稿文を寄せていただいたりと、会に大きなお力を注いでくださいました。

会として、追悼号を企画し、近藤先生とご親交の深かった先生方からのご寄稿をまとめさせていただきました。心あふれる思い出の数々が綴られております。

近藤喬一先生の多大なるご功績に改めまして敬意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。



2019年5月19日保存会で講演
した近藤喬一先生

近藤喬一先生ご略歴

- 1953年 東京慈恵会医科大学卒業
- 1954年 同大学精神医学教室
- 1959年 南米にて比較文化精神医学研修
- 1969年 町田市立市民病院神経科医長
- 1970年 北米留学
- 1992年 大正大学人間学部教授
- 1999年 同大学退職後、クボタ（錦糸町）、はしもと（調布）クリニッ
クにて臨床に従事
- 2024年 8月8日ご逝去 享年96歳

追悼 近藤喬一先生 数々の思い出を ありがとうございました

丸山 晋（K J サイコセラピー研究所長）

近藤喬一先生ほど多くの Dr.に好かれた先生を知りません。

高良武久先生とは肝胆相照らす仲でした。おふたりとも、リベラルということが共通項でした。バートランド・ラッセルの「知恵に依って導かれ、愛によって勇気づけられる」が座右の銘でした。

阿部亨先生とは、年齢も近く、兄弟みたいな関係でした。おふたりとも江戸っ子気質とその粋を愛し、その掛け合いは、羨ましいほどでした。

私の所属した教室は、三々五々飲みながら、精神医学を語る風習があり、若い頃の私は、大変多くを学ばせていただきました。先生は、海外の精神医学事情に通じ、その該博な知識は、驚くばかりでした。

また、先生は、私のいた精神衛生研究所（現精神保健研究所）の元所長であった故土居健郎先生とも親交があり、多くの国際シンポジウムに参加されていました。後輩である私は、おおいに誇りに思ったものです。

どうぞ、先生、安らかにお眠りください。

近藤喬一先生の思い出

北西 憲二（森田療法研究所 北西クリニック院長）

近藤先生とはずいぶん長いお付き合いをしてもらった。去年の8月にご逝去されたが、「北西君・・・これこれだよ」などと今でも話しかけられるような気持ちにもなる。私の恩師は新福尚武先生だが（90代後半でお亡くなりになった）、私にとって近藤先生は、「こんちゃん」である。親しい兄貴分であり、相談相手であり、親密な友人（近藤先生はどう思っていたか分からないが）だった。また私の精神医学（特に精神療法領域）での導き手だったし、ある時代を共有できたことをうれしく思っている。

1970年に慈恵医大を卒業し、精神医学教室に入局したときは、近藤先生は、町田市民病院の医長をされていたと思う。その頃から「火曜会」（読書会）が、近藤先生、藤田先生を中心に六本木の「国際文化会館」で行われており、時に顔を出していた。

本格的に交流が始まるのは、1980年に第三病院医長として赴任した頃からである。近藤先生の発案で「森田療法研究会」が発足し、藤田、近藤、阿部、藍沢諸先生と森田療法について自由闊達に話し合う機会を持つことが出来た。後の飲み会は楽しかった。それが後に「森田療法研修セミナー」の母体となった。黎明期の集団精神療法学会では、近藤、増野理事長を支え、事務局長として苦楽をともにした。近藤先生は、当時東京都精神医学研究所の社会精神部門の非常勤をしていた。吉松和哉先生や慶応出身のバリバリの分析家の皆川邦直さんに引き合わせてくれたのも近藤先生である。

その後近藤先生の盟友、韓国の李先生（元ソウル大学教授、ユング派の精神療法家でもある）と東アジア文化精神医学会を立ち上げ、私も日本側の事務局長として参加した。後には中村敬先生も加わり、多いに盛り上がった。

近藤先生が最初に声をかけてソウルまで行ったメンバーがすごかった。土居健郎、笠原嘉、吉松和哉、齋藤学、成田善弘諸先生に、私も末席で出席した。楽しい会だった。

近藤先生を介してさまざまな人たち（交友関係が広がった）と交流を持つことが出来た。また二人で明大前の今はないドイツ風の居酒屋（多分プロストという名前だったと思う）でよく飲んだものである。いずれにせよ、酒席での話が、もっとも面白かった。そして「君ね、〇〇はこんなやつだぜ。」という裏話は、とても文章には残せないが、腹を抱えて笑ったものである。

近藤先生は女性によくもてた。洒脱で、やさしく面倒見がよく、人を引きつける魅力があった。

飲んべいだった近藤先生は、「もう一杯のこんちゃん」として有名だった。さあ帰ろうか、というときに今までこっくり、こっくり居眠りしていた近藤先生が「もう一杯」といいだし、酒に弱い私は「参ったな」という感じだった。

酒にまつわる話をもう一つ。亡くなる直前に仙川の寿司屋で、二人で飲む機会があった。大いに盛り上がって近藤先生は焼酎をしこたま飲んでいて。タクシーを呼んで、近藤先生を送っていったのだが、重そうな物が入っているリュックを背負っていた。中身は、仙川で買い求めた白ワイン 2 本である。近藤先生は、自宅の前で、タクシーから転がり落ちた。しかしリュックの中身であるワインはしっかり守り、前方に突っ伏した。「大丈夫だから…」といったが、めがねは飛んでおり、階段を上ってご自宅の玄関まで送った。「先生と酒が無事で何より」と話して別れたのが最後になってしまった。

2024 年 9 月 7 日に「近藤先生を囲む会」があったのだが、「偲ぶ会」になってしまった。ご冥福を心から祈ります。

あと 3 本！

中安 信夫（原病院顧問）

近藤喬一先生が令和 6 年盛夏にお亡くなりになられた。例年のごとく北西憲二先生や中村敬先生を中心とするお弟子さんたちの音頭で開かれる今秋の「近藤先生を囲む会」への出席を楽しみにしていた矢先の突然の訃報であった。私が近藤先生に初めてお目にかかったのは昭和 62 年（1987）のことでもう 37 年も前のことである。それは当時、吉松和哉先生が室長をされていた東京都精神医学総合研究所社会精神医学研究室に招かれて講演を行なった時であった。名目は講演会であったが、そのじつ私を研究員として招請しようという意図で、席を替えての慰労会で正攻法で私を勧誘される吉松先生の傍で、あの粹なお姿でいかにも江戸っ子らしい洒脱な口調で「吉松先生は誰よりもあなたに来てもらいたいんだよ」と私を口説かれたのが非常勤研究員であった近藤先生であった。

年改まった昭和 63 年（1988）に私は都精研に移り、また先生が医長をされていた町田市民病院精神科へ週 1 で通い始めたが、夕刻、お猪口で酒を呑む仕草をして「やっさん（安さん：小学校時代からの私の仇名）、ちょっと行きますか！」と声かけされて酒席を共にしたのは数えきれないほどである。そうした酒席にはいつも多くの人が溢れていた。弟子筋の医者だけでなく、看護婦さん、臨床心理士、はては病院附属の看護学校のうら若い学生などで、皆が近藤先生のお人柄を慕って自然に寄り集まってくるのであった。それは誰に対しても偉ぶることなく、また小難しい話などされることもなく、ただただ旨い酒と美味しい料理を味わい、そして冗談と笑いが織り混ざった、ちょっと知的な会話を楽しむという、まさに極上の酒呑みの姿がそこにあった

からであろう（後年になって私が、酒席で論文や患者のことを訊ねてくる若い医者に「酒が不味くなるからそういう野暮はやめろ」と言い始めたのは、この近藤先生の「呑みざま」を思わず知らず真似してのことであろう）。外でしこたま呑んだ挙句にご自宅にお邪魔をして極上のワインでまた一飲みして泊めていただいたこと、研究室の慰安旅行で伊豆を訪ねた帰途、皆とは離れて二人して小田原駅前の蕎麦屋の小上がりで板わさと出汁巻き卵を肴にして冷酒を酌み交わしたことなど、思い出せば懐かしい酒席の場面がきりなく走馬灯のごとくに浮かび上がってくる。中でもいまでも耳元にありありと残っているのが、お酒がすすみ酔いがまわるにつれて「（お銚子を）あと3本！」と注文を呼ばわっていた、その大きな声である（「あと3本！」はその後も何度も続くのであった）。都精研を去った後の私は分裂していた東大精神科へ戻り、統合の激務の中に身を置いたが、その疲れを癒してくれたのは都精研と町田市民病院を去った後も時折お会いしては共にした近藤先生との酒席の心地良さ、近藤先生の心温かさであったろうか。大学も医局も、また学問領域も異なるのに、なぜか私は近藤先生に最良にしていたいただいたという思いがある。「どうしてですか？」と尋ねる野暮はしなかったが、時折仰った「やっさんと呑むのは楽しいんだよ」とのお言葉からは、似た者同士、呑兵衛と呑兵衛が惹かれ合ったということであろうか。

その楽しい酒席を共にすることはもはやできなくなってしまった……寂しいかぎりである。

近藤喬一先生を偲ぶ

増茂 尚志（皆藤病院副院長）

近藤先生が突然亡くなられたと聞いてとても驚きました。

年齢こそ 96 歳でしたが、伝え聞いた生活状況からは、まだまだお元気と思われ、近々、「近藤先生を囲む会」を開催する予定だったからです。

私は、残念ながら近藤先生の下で勤務する機会はありませんでしたが、一時期、町田市民病院に脳波判読医として勤務させていただいていました。

当時、町田市民病院のスタッフと近藤先生が中心になって精神病理学の古典を読む「火曜会」と称する読書会があり、私も「火曜会」で何度か発表し、そのたびに貴重な助言をいただきました。火曜会は、医師、心理士、PSW、看護師など多彩な職種の人たちが、多様な所属先から、年齢・立場を超えて集まる稀有な場でしたが、その求心力は、なんと言っても近藤先生の広い人間関係と知識経験であったことは言うまでもありません。

私が近藤先生と二人きりでお話しをする機会はわずかでしたが、今でも覚えているのは、近藤先生が町田市民病院を退職する前のことです。近藤先生の後任に私を推薦したいといってくれました。とてもうれしかったのですが、ひどく緊張したことを思い出します。

しかし、当時の慈恵医大の牛島教授には町田市民病院運営に別の構想があり、私が町田市民病院に勤務する機会はないままになりました。

当時の町田市民病院の「うつ病専門病棟」は、様々な改革を経て実現されたもので、近藤先生は医師と他の職種間のヒエラルキーを排し、対等に議論する画期的な病棟運営を実現されていました。私は、そこに勤務する経験はないままでしたが、数年前、近藤先生が大正大学を退任された後も続いていた「読書会」で、近藤先生自身から、町田市民病院の病棟改革と、遷延性・

難治性うつ病の治療経験を講義していただく機会がありました。私は栃木県精神保健福祉センターで「うつ病復職デイケア」を運営していたこともあり、大いに啓発されましたが、あらためて、近藤先生だからこそできたことであったのだろうと感じました。その理念と活動の実際は近藤先生の著書 1), 2) から窺うことができます。

「火曜会」は、近藤先生が大正大学の教授に就任後は、大正大学の先生方も交えての「読書会」となりました。そこでは英語の論文や著書の一部を輪読していましたが、やがて、それは金剛出版から「スペリー著：パーソナリティ障害―診断と治療のハンドブッカー」の訳本の出版として結実しました。3)

この翻訳作業では、私の作業が遅れている間に改訂された原著第二版が出版されてしまうという事態が生じ、近藤先生をはじめ、翻訳を分担していた先生方に多大なご迷惑をおかけしてしまいました。近藤先生は、このような私がもどかしかったのでしょうか。いつだったか、「おまえさん、もうちょっと、なんとかさあー」と、近藤先生がよく使う江戸っ子弁の言い回しで叱咤激励してくれました。その後も、私が何ともならなかったのは、現在の状況が示す通りですが、今でも近藤先生のことばは、とてもありがたく思っています。

近藤先生の代表的な訳本に、アリエッティ「分裂病（当時のまま）入門」4). があります。この本の冒頭には、患者さんが突然の幻聴に困惑する様子が簡潔な訳文で示されています。近藤先生の文章は、どれも格調高く簡潔ですが、実際の会話では洗練された軽妙洒脱な言い回しを好み、誰とでも気持ちよく話しをしてくれて、その様子は実に「粹」でした。

近藤先生の訃報に接し、何人かの方に連絡しましたが、多くは同じ言葉が返ってきました。「もう一度お話ししたかった」と。近藤先生は、そのよう

な方でした。

あらためて近藤先生のご冥福をお祈りします。

- 1) 近藤喬一，鈴木純一編：集団精神療法ハンドブック，金剛出版．1999．
東京
- 2) 近藤喬一編著：うつを体験した仲間たち．うつ病のセルフヘルプグループ実践記．星和書店．1999．東京
- 3) レン・スペリー著，近藤喬一・増茂尚志監訳：パーソナリティ障害：診断と治療のハンドブック．金剛出版．2012．
- 4) シルビアーノ・アリエッティ著．近藤喬一訳：分裂病入門．星和書店、
1980、東京

町田市民病院の日々

中村 敬（東京慈恵会医科大学森田療法センター）

2024 年 8 月の猛暑の日、翌月には近藤喬一先生を囲む会が企画され、1 年ぶりの再会が叶うと思っていた矢先に、突然の先生の訃報に接しました。いつかはやってくることと薄々覚悟はしていたつもりですが、それでも喪失感想像以上に大きなものでした。

近藤先生に初めてお目にかかったのは、1983 年の秋、私が慈恵医大精神医学講座に入局して 2 年目のことでした。佐々木三男先生のはからいで、慶応大学文学部にいらした精神病理学の泰斗、荻野恒一先生に紹介いただいた酒宴の場に、荻野先生と親交の深かった近藤先生も同席されたのです。はじめのうちは初対面の大家の前で緊張していたものの、近藤先生の豪快な飲みっぷりと、座をなごませるさりげない心配りに助けられ、後半は随分寛いで先生方のお話を聞くことができました。それ以来、荻野先生に私淑して慶応大学に通うことになったのですが、近藤先生のお人柄や町田市民病院で先生が主導された治療共同体の実践にも強く心を惹かれ、森温理教授に我がままと許して頂き、週 1 日の非常勤で同病院に勤務することになりました。

その頃、町田市民病院の病棟はうつ病の患者が多数を占めていたことから、うつ病の薬物療法や精神療法について近藤先生にご指導いただく機会が多くありました。やがて先生の意を受けて運動療法を試行したり、うつ病者の自助グループの立ち上げに加わることもなり、これらの経験は私のうつ病治療の礎になりました。

「語学の天才」と呼ばれた近藤先生は、英、独、仏、伊、スペイン語の文献を読みこなし、「精神療法」という雑誌には先生の翻訳による海外文献抄録が連載されていました。それに憧れた私は、先生にお願いして一時期ドイ

ッ語を教えて頂いたのですが、あまりの単語力の乏しさに業を煮やした先生から「ドイツ語はもういいから英語を勉強なさい」と言われて、野望はあっさり潰えたのでした。

当時、町田市民病院には藤田千尋先生も非常勤でいらしており、夕方になると近藤先生、藤田先生を中心に精神科のスタッフが外来に集まり、勉強会が開かれていました。近藤先生が「訝りの精神病理」というテーマで話をされたことも懐かしく思い出されます。けれどもこの会の本番は勉強会の終了後から始まるのです。各自が持ち寄った酒を酌み交わすうちに談論にわかに活気づき、精神医学や精神療法に関するお二人の先生のご高説はもとより、若かりし頃の武勇伝や海外でのほろ苦い思い出、昔の医局の奇人譚に至るまで、実に様々な興味深い話が尽きず、やがて気持ちよく酩酊された近藤先生の口から、かつて弟子入りを志願したという桂文楽の名文句「すっぱらげっちょ」（すつとこどっこい、のような意味でしょうか）も飛び出して、すべての酒が飲み尽くされるまで宴は続くのでした。後にこの会は「火曜会」という名称を冠して、中安信夫先生をはじめ慈恵以外の先生方も参加されるようになり、近藤先生を中心に精神医学と酒が程よく調和した特有の文化が形作られていったのです。

今こうした日々を振り返ってみると、精神医学の書物から得た知識よりも、当時の雑談の中で近藤先生から伺った「耳学問」の方が、若かった私の心により深く刻まれ、精神科医として歩む上での道標になったと思うのです。近藤先生の下で学んだ日々は私にとって生涯の財産になりました。先生、本当にありがとうございました。

町田市民病院でお会いした近藤先生

井出 恵（森田療法研究所 北西クリニック）

近藤先生とのご縁は、私が新米医師だった頃、町田市民病院神経科に週一度勤務させていただいたことに始まります。単科の精神科閉鎖病棟の経験はありましたが、市民病院の開放病棟の空間は大変新鮮で、短い勤務期間ではありましたが強く印象に残っています。コの字型に配列された病室やデイルームはどの部屋も日当たりがよく、中央にだれでも入れるナースステーションがありました。そこで行われるスタッフミーティングでは、近藤先生をはじめとした医師、看護師、ソーシャルワーカー、心理士など他業種が円卓を囲んで、率直な意見が飛び交っていました。一人一人のスタッフが信頼され、それぞれの立場で主体的にお仕事をされている様子が伝わってきました。病棟は明るく自由な風が吹き、故藤田先生が連句の会をなさっていたり、運動表現療法があったりしましたが、各活動への参加は患者さんの自由意志に任されていました。

午前中は外来、午後は病棟、そして夕方には火曜会という勉強会に参加させていただきました。近藤先生を囲んで、和やかでありながら大変アカデミックな雰囲気でした。先生の知とお人柄に惹かれ学びたい人は後輩を含めて数多く続いていました。

初めて町田市民病院に伺った日は、広々とした病棟内診察室で、先生の書棚を見せていただきながら、病棟の開放化に尽力されたお話をしてくださいました。当初は3年の任期の約束で赴任されその後ドイツ留学のご予定があったそうですが、丁度当時の看護長さんらと開放化の運動を始められ、そのまま留学を断念されて市民病院にいらしたそうです。

一昨年の11月に、町田でご一緒した看護師さんから声をかけていただき、当時のスタッフさんと一緒に成城の中華屋さんで先生を囲んだ少人数のお食事会に参加させていただきました。先生はお元気で、市民病院のことを思い出しながら生き生きとお話ししてくださいました。ふとフランス語の詩のフレーズを口にされ、あれは誰の何の詩だったのか、お聞きしておけばよかったと悔やまれます。とても音楽的な響きでした。

19歳で就職した看護師さんのお話では、翌年に近藤先生が赴任され、当時は全閉鎖でほとんどの病床が精神衛生法第29条による指定病床でした。そこから近藤先生はスタッフの方たちと何度も話し合い病院の建て替えも経て、市民病院は閉鎖から全開放へと変わっていきました。精神科のスタッフはもちろん、町田市の他の精神病院、町田市の保健所や福祉などたくさんのメンバーの中心になって、様々な問題を乗り越えその運動を進めていかれました。今から半世紀以上も前のことです。市民病院の病棟では森田療法を実施したこともあったそうです。

今回改めて当時のスタッフの方たちに開放化の頃のお話をお聞きして、先生の偉業の底にある、信念を貫く厳しさと誰にでも平等な暖かさに心打たれました。外交官のお父様と音楽家のお母様を持っておられた先生は、多言語で様々な分野の書物に親しみ、フォーレのレクイエムを愛し、ユーモアにあふれ、水泳や歩くこともよくなさっていました。

近藤先生にお会いできたこと、市民病院の明るく自由な空気に触れられたことは、私の心の財産となっております。

ご冥福をお祈り申し上げます。心より感謝を込めて、ありがとうございます。

近藤喬一先生を囲む読書会の思い出

塩路 理恵子（東京都立大学）

私が近藤先生にお目に掛かったのは、「森田療法研究会」が最初だったと思います。私たちは慣れない研究会で「門前の小僧」の状態で、先輩方・大先輩方の間で交わされる話を見聞きしていました。その中でも近藤先生の洒落なたたずまいと自由なお話しぶりに、私たちは「格好いい先生だよね」と帰り道に話していたものでした。その後、町田市民病院で近藤先生を中心に様々な職種の方そして北西憲二先生、中村敬先生、中安信夫先生など錚々たるメンバーによる「火曜会」という伝説の読書会ともいうべき会があったこと、その後もいろいろなメンバーで読書会が行われてきたことを伝え聞き、内心憧れを持っていました。たまたま森田療法研究会の後の会が居酒屋のような気さくな場所で行われた日、今ならお願いしやすいかもしれない、と思い切ってお願ひしてみたところ快くお引き受けいただき、読書会が始まりました。その時々でメンバーが代わりつつ、火曜会にも参加されていた風間興基先生、増茂尚志先生にもご参加いただき、途中からは大久保菜奈子先生に幹事役を引き受けていただき、時に細々とになりつつ継続しました。火曜会では原書を読まれていたと聞いていたのですが、私達にはハードルも高く、お願いして精神医学の必読書ともいえる書物をメンバーの希望で選び日本語で読む、という形を取らせていただいていたのですが、思い出すままに記すと、テレンバッハ「メランコリー」、シュルテ「精神療法研究」、ミンコフスキー「精神分裂病」（書名のまま）、和書では土居健郎「甘えの構造」、木村敏「あいだ」その他。これらの書物を、とても読み込んだとはいえない不勉強さが情けないところですが、「近藤先生を囲んで読んだ経験」を持てたことは、一精神科医として非常に幸運なことでした。照れ屋であられてかご自身がレ

クチャーをされるという形はあまりとられなかったのですが、何度か高良興生院での経験、町田市民病院での経験をもとにグループについてお話をしていただきました。その中で、森田療法は Milieu therapy（環境療法）の側面を持つ、と話されていたのが印象に残っています。

そして私たちにとって、おそらく先生も勉強会以上に楽しみにしていたのが、その後の先生を囲んでの飲み会です。ドイツ、フランス、南アメリカ…先生が訪れた国、会った人のお話を目を丸くしながら聞かせていただきました。また先生の傘寿の際には勉強会と町田市民病院で先生とお仕事された方々、そしてそれを聞きつけた方…とびっくりするくらいたくさんの方々とお祝いできたのも楽しい思い出です。

それだけ人を惹きつけ、人に囲まれていた先生ですが、独り歩くこともご自身の中心に据えておられました。お酒の席で先生はよくヘッセの「秋の徒歩旅行」のことを話されていたことが印象に残っています。異郷に暮らす主人公が10年の歳月を経てふると（ドイツ南西部のヘッセ自身の出身でもある地）を数日掛けて徒歩で旅する物語ですが、先生はドイツの若者がそのような徒歩旅行を行う伝統があることを話しておられました。物語の終盤には次のような文があります。「幾瞬間かのあいだ、きみはその中に象徴的なものを、驚くほどはっきり感じる。また、物と物が、人と人が、だれであろうと、根本においてあくまで無縁であり、われわれの道は常に散歩、数瞬の間だけ交わるにすぎず、結縁と隣合いと友情のはかない外観を示すにすぎないことを感じる。（高橋健二訳）」。先生はずっと多摩川沿いの散歩を続けられていたとうかがっています。青年のような眼差しで歩みを進められていたのかなと想像しています。

また近々先生を囲んでお話しできるものと楽しみにしておりました。

ご冥福をお祈りいたします。

父のこと

近藤 淳（近藤喬一先生 ご子息）

父の逝去から半年が経ちました。葬儀から様々な役所関連の手続き、自身の仕事や息子の大学受験などと慌ただしく過ごす中で、いまだゆっくりと父との思い出を回想する余裕も無く、加えて父の遺品整理、とりわけ膨大な蔵書などはほとんど手つかずのままの中(これについては頭を悩ませております)この度こうした振り返りの機会を頂き、ありがたく思いつつも、お目汚しの乱筆・乱文甚だ恐縮しておりますが、何卒ご寛容のほどお願い申し上げます。

幼少期の自分にとっての父は、当時の所謂「昭和の父親像」の典型と申しますのか、およそ今時の父親のように積極的に子供に関わることなく、仕事から帰宅すれば食後はさっさと書斎に引きこもるのみ、とりわけ町田勤務時代は当直明けや外来日などの帰宅時など、さながら戦時下の灯火管制の如く、家族皆ヒリヒリとした空気の中で過ごしていた記憶があります。

それでも小学生の時分、日曜日には毎週のように父と出かけた時期がありましたが、それも父が単に散歩や近所のプールに出かけるのに連れ出されるだけで 2 歳下の弟などは早々に離脱、長男の私は誘いを断れば父が機嫌を損ねるのを恐れて渋々お供をしていたようなもので、昼食など私の希望は聞きもせず蕎麦屋と決まっておりましたし、行先も公園だの庭園だの、あるいは多摩川土手歩きだのと、本当に単なる散歩・散策ばかりでした。ただ唯一、外出時には本屋に立ち寄る習慣のあった父が、この時は必ず最後に「何か欲しいものはあるか」と聞いてくれた事だけが印象に残っております。もっともここでも、悲しい長男の性なのか、空気を讀んだ私は漫画が欲しい気持ち

をぐっと抑えて少しでも父が認めてくれそうな文学書などを選んでおりました。

そんな父とは、私が結婚後も近くに住んでいた事などもあり、付かず離れずの関係にはありましたが、2世帯同居、とりわけ母が亡くなってからは自ずと接する時間が長くなり、私がとあるきっかけでフランス語の勉強を始めたと聞くや、辞書を選んで買ってくれたり、自分の好きだったドーテの「風車小屋だより」を原書で持ってきたり、これは後になって知ったのですが、書斎を整理していたらフランス語の文法書などを新たに買い求めて自身で秘かに復習したりしていたようで、想像するに、医学の道に進めなかった親不孝な息子とようやく共通の話題が出来た事を喜んでいたのかもしれない。

享年 96 歳と、世間的には大往生という事になるのですが亡くなる前夜もワイン抱えて階段をひとりで上って来て、ボトルを空け「お休み」と寝室に見送った翌日という、あまりにもあっけなすぎる去り方だっただけに、その当時はどうにもしばらくは心の整理もつかず、何故 1 階にカメラを付けなかったのかとか、寝る前に様子を見に行ったら異変に気づけなかったかなどと何度も自責の念に駆られました。今でも階下に行くとリビングで父がワイングラスを片手に時代劇チャンネルを見ているのではないかと思う事もあります。父の亡くなった 8 月 8 日は母の命日の 1 週間後、おそらく天国の母から「あなた、いつまでそっちにいるつもりなの？」と催促されたのではないのでしょうか。

生前父は酒席で口癖のように、自分は大した人間ではないが一つ誇れることは人に恵まれた事だと、自分のまわりは本当に優秀な連中ばかりで、これだけは自分の財産だと常々申しておりました。

この度こうして父のためにこのような企画をお組みいただき、まことに感

謝しております。

末筆ながら刊行に当たってご尽力いただきました事務局の皆様、寄稿いただきました諸先生方を始めとする誌面にお目を通される皆様方に、生前父が大変お世話になりましたこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

父もこの度の刊行を天国よりさぞかし喜んでいることと思います。

誠にありがとうございました。

純 な 心

近藤 喬一

10 月の上旬に福岡市で第 20 回森田療法学会が開催されました。そこで「純な心百考」というテーマのシンポジウムが行われ、筆者は参加者のひとりとして報告をすませ、帰って来たばかりでこの原稿を書いています。

森田が強調した「純な心」というのは、分かりやすくいえば「素直な心」、「とらわれないそのままの心」で、彼は「すべての思想や行動を、感じや直感から出発するよう指導する。ここから出発する精神の発動が人間最上の真知識」と言っております。つまり、人間の感情や直感の働きが、事柄の中心であるとみなすのが森田療法の心髄ということになります。

神経症の治療というようなことを離れても、こうした心の純な状態を考えることは意味があると思います。誰にとっても、毎日の生活というのは、あまり変わり映えのしない出来事の連続であり、そのなかでいつしか我々は、物事はなるようにしかならないという打ち克ちがたい考えにとらわれてしまいがちです。そうこうするうちに、他人が考えるように考え、感じるようにしか感じなくなってしまうことにもなりかねません。

そうならないためにも、なかなか難しいことかもしれませんが、森田が「純な心」という言葉で表現した心もちがたまたま持てるように、いつも感覚を磨き続けていたいものです。我々がこの世に生きる愉楽を覚えるのは、まさにこうした瞬間においてでありましょうから。

(2002 年ニュースレター旧No.3 から転載)

高良興生院と森田療法

近藤 喬一

蕪村に「遅き日のつもりて遠きむかしかな」という懐旧の句がある。興生院に大学の医局からパートで勤務したのが1954年であるから、まさしくつもりて遠い茫茫たる過去のことになる。思い返してみると、そこに浮かび上がってくるのは、やはり、ひとりひとりの患者さんのことである。印象的なのは彼らが病を体験する、あるいは訴えるその仕方が真剣・直截(ちよくせつ)で絶対的なことである。そうしてまた、輪郭がはっきりしていることである。この点は平和ボケの現代の様子とは違いがあったような気がする。

オランダの史家ホイジンガはその名著『中世の秋』の冒頭で、次のような意味のことを述べている。「世界がまだ若いころ、人生の出来事は今よりもっとくっきりした形をみせていた。……悲しみと喜びのあいだ、幸と不幸のあいだのへだたりは、わたしたちの場合よりも大きかったようだ」。

このような事情は、当時の興生院の入院患者の中核だった森田神経質の病態の特徴や、各年代の文化的情況の相違に関係しているかもしれない。一方で患者さんたちは、興生院の自然と静寂につつまれた環境のなかで、思い思いに時間を過ごしていた。森田療法では身体を動かす仕事行動を重視するとよく言われるが、高良先生はそのほか知的理解についても軽視されなかったように思う。それは毎週木曜日に行われる講話や、日記指導のコメントなどにも現われた。

興生院には、医師・看護師・作業療法士などのほか、例えば料理を担当する女性を小母さんなどと呼んで一種の治療チームを形造っていた。こう考えると入院療法は集団で行われていたと考えても間違いはない。ただ、興生院でのそれは森田療法であったし、集団をひとつの治療構造として自覚的に扱

っていたかどうかという点になると、必ずしもそうとは言えないであろう。興生院での入院患者は森田神経質ばかりでなく、その他の疾患も入り交じるのが常であった。

私は集団療法に興味があったが、当時は若造(わかぞう)の身でそのようなアプローチができるわけがない。しかし比較的長く勤務できた間には、小規模で試行したこともできた。それには阿部先生が来られて、受持患者の制度になったことも幸いしたと思う。例えば雨の日など、患者同士が数人集まってお互いの苦しみを話し合い、先輩がアドバイスをしたりするのを見て、それを自助グループの形にしたりとか。

また、受持患者をグループにして話し合う程度のことはやった覚えがある。その後の職場で当時「治療共同体」などと呼ばれていた方式を実施したり、仲間と集団療法学会を立ち上げたりしたこともあり、興生院での経験を集団という観点から見直すのも一興かも知れない。

フランスの精神医学に「制度としての精神療法」と称する概念があり、1953年にG・ドムゾンの提唱によるが、その主旨はこうである。治療のための集団といっても、それはただ経験に基づいて作られたようなやり方を超えて、社会との絆をとり戻し、現実との生きた触れ合いを見つけるために共同体での生活を役立たせることが重要と主張した。それには二つの焦点をもつモデルが必要で、その一つはそれぞれの患者を担当する精神療法の専門家であり、もう一つは日常生活の面を支持してくれるような人びとを備えることも同時に要求される。

もともと広義には、治療環境にとって有害な条件を精神療法的な手段を用いて改善するというのが趣旨であったが、このやり方は一步も二歩も踏み出したものといえる。そして興生院にはこの二つの条件を充たす人員が揃っていると考えられる。大きく、しかも緩やかにこの方法を集団としての森田入

院治療に被(かぶ)せて実行することも可能ではないかというのが、私の半ば
空想めいた想いである。 (2019年ニュースレターNo.15 から転載)

■編集／発行 高良興生院・森田療法関連資料保存会

◇連絡先 〒161-0032 東京都新宿区中落合 1-6-21 (旧高良興生院跡)

社会福祉法人かがやき会 就労センター『街』

電話：03-3952-9975 但し、火～土曜日 10時～16時

◇電子メール info@hozonkai.net ◇ホームページ <https://hozonkai.net/>

高良興生院・森田療法関連資料保存会